



なぜ放射線について知りたいのか

藤島 かおり

Fujishima Kaori

1. はじめに

2013年11月14日、鹿児島市民文化ホールにて開催された放射線安全取扱部会の年次大会のシンポジウムに参加しました。

会場から桜島の噴煙を間近に見ることができました。周りの人々の生活が、山が噴き出す灰におびえることなく、むしろ当たり前のように溶け込んでいる様子を見て、脅威とも自然体で向き合って生活することの重要性を改めて感じました。

自然界の脅威と同じレベルで語ることは適切ではないかもしれませんが、放射線に対しても同じように、全ての人々がその脅威に怯えることなく生活することができれば、などと考えながら、「母親、子供たちに伝えたい放射線教育」というシンポジウムで、“放射線の『何が』怖いのか”という内容の発表を行いました。

2. シンポジウムでの内容

筆者が放射線教育を行う際は「放射線は怖いですか」という質問をします。多くの人が、放射線が人体へ影響を及ぼすことは知っているのですが、その詳細が分からないために漠然とした恐怖を感じていました。

福島第一原子力発電所の事故以来、多くの人が原子力や放射線に対して強制的に向き合わされ、懸命に情報収集を行ってきました。その要

望にこたえるようにテレビではニュースや特番が放送され、インターネットの世界では難しくよく分からない情報がどんどん増えていきました。

あまりにも多様な情報があふれてしまい、どの情報が正しいのか、どの情報が信頼できるのか、どう行動すべきなのかといったことを自分たちで判断できずに混乱していきました。

多くの人にとって、本当に欲しい情報というのは“ここに住むこと、この食べ物を食べることが大丈夫なのかどうか”だったはずですが。その情報が二転三転し、結局のところ大丈夫なのか大丈夫じゃないのかという一番大事な情報を見つけることができず、更に混乱していきました。

この混乱を取り除き、少しでも不安を減らすために、相手が知りたいと思っていることを相手が知っている言葉で理解してもらうこと。それが放射線教育の1つの目的だと考えています。

それでも、本来一番欲しがっているはずの“大丈夫なのかどうか”については筆者には答えられません。大丈夫か、大丈夫じゃないのかの基準は人それぞれです。あくまでも混乱した糸をほぐすことが筆者の行う放射線教育であり、大丈夫かどうかの判断をするのは受講している一人一人だと思っているからです。

3. テーマの意味するところ

前記のような発表を行ったところ、「放射線教育では感情を挟まずに事実を淡々と伝えるべきでは」、「原発事故の影響に特化すると、受け手の感情が歪んでしまうのでは」、「安心させるために、専門家であるからこそ『安全』というべきでは」といった意見をいただきました。

皆さんの意見を聞いているうちに、今回のテーマである「母親、子供たちに伝えたい放射線教育」には実は2つの意味が含まれているのだと思ひました。

“母親に伝えたい放射線”と“子供たちに伝える教育”です。

今回のシンポジウムの発表で、筆者は前者について意識しながら語りました。

4. 母親と子供の違い？

今、世間の母親たちに「放射線について知りたいことは何か」と聞けば、多くの方が原発事故を連想し、それに関連した事柄を知りたいと答えます。

ですから必然的に事故に関連した話が多くなり、“私たちどうなるの？”という自分の子供の将来を含めた不安を取り除く鍵を渡すことが話の中心になります。もちろん言葉の解説や物理現象にもふれますが、人体への影響に最も時間を割くことになります。

いまだに多くの方は、何を信じていいのかわからない状態です。しかも、専門家同士が批判し合ったり、言っていることが正反対に聞える状況を見てしまっています。いくら専門家が「安全だ」「大丈夫だ」と言っても信じてくれません。逆に、「やっぱりこいつも信用できない」と、全く話を受け入れてくれなくなることさえありますので、相手の気持ちを気にしながら言葉を選ぶ必要があります。

一方、中学校や高校で授業時間を借りて話をする場合は、放射線物理学や放射化学、測定原理などを伝えます。また、どのような分野で放

射線が利用されているか紹介します。

原発事故も触れますが、主に原子力発電の仕組みや地震発生から現在に至るまでの経緯や状況などの話になります。

受け手の感情に左右されることなく、科学的事実をそのまま伝え、放射線の世界に興味を持ってもらおうと意識します。

今回のシンポジウムでいただいた意見は全て男性からのものです。もしかすると男性と女性では、知りたい内容や知りたいと思う理由が違うのかもしれませんが。

もし開かれる講習会のテーマが“『父親』に伝えたい放射線”だったとしたら、その内容は科学的な事実や根拠が中心となった、学校での教育に近いものを紹介することになりそうな気がします。

実は今回筆者が参加したシンポジウムは女性の視点で放射線教育を語るという企画でした。

放射線教育を行っているときに自分が女性だから、と意識したことは一度もなく、女性としての話ができたとはいっていませんでしたが、発表を聞いてくださった方と意見を交わしているうちに、この企画の意味するところが何となく見えたような気がしました（終わってから気付くようでは実行委員の皆様に怒られそうですが）。

5. 最後に

母親たちの混乱を少しでも取り除くことができたら。そこで子供たちと共に不安のない生活を送ることができたら。さらに、未来の大人たちが放射線に対するアレルギーを持たず、どんどんこの業界に向かってきてくれたら。そして、父親たちにも放射線の知識を普及することができたら。

そう思ってこれからも放射線の話をしていこうと考えています。

(日本アイソトープ協会)